長大多文化
環球通信

食の異文化交流 小さな町に活気

@米国・ノーザン州立大

銀世界が一面に広がる町、アバディーン。留学先のノーザン州立大学は米国中西部のサウスダコタ州にある。人口は長崎市の1割に満たない小さな町だ。3月に入っても気温は零下20度と、厳しい寒さが続く。

極寒の季節がやってくる前の昨年10月31日。大学教授宅でハロウィーンパーティーが開かれた。「トリック・オア・トリート！」。憧れのヒーローやプリンセス、好きな動物などのお気に入りのコスチュームを身にまとった子どもたちが、次々にドアをたたく。

ハロウィーンと言えば、日本では若者たちが楽しむ仮装イベントという印象が強い。しかし、この町では子どもから大人まで幅広い世代が参加し、住民たちが交流する機会になっている。住民は一人ひとりにお菓子を配りながら、相手の家族と近況を報告し合う。楽しむだけではなく、子どもたちの成長や健康を祝う大事な日でもあるようだ。

翌11月1日には大学主催の「カルチャー・フェスティバル」が開かれた。欧州やアジアの留学生が、生まれ育った土地の文化を現地の学生や地域住民に紹介する。ステージも設けられ、プエルトリコや韓国の伝統的なダンス、アルゼンチン音楽などが披露された。

雪景色が広がるノーザン州立大の入り口付近＝2018年12月、いずれも米サウスダコタ州アバディーン

たこ焼き 住民らに振る舞い盛況

会場に設置されたフードコートでは、各地を代表する料理がバイキング形式で並べられ、「食」の交流が活発に行われた。中華料理は春巻きやチャーハン、ごま団子など、日本でもなじみ深いものが多かった。一方、新鮮だったのはサウジアラビアの牛肉料理。じっくりと甘辛く煮込まれ、角煮のように軟らかい。あの味は今でも忘れられない。

私たち日本人留学生は、たこ焼きを振る舞うことにした。日本好きの現地の大学職員がわざわざ日本から取り寄せた、たこ焼き器を貸してくれたからだ。ボール状に徐々に形を整える調理過程が国外の人には興味深いようで、店は盛況だった。

たこ焼きをつくる筆者（中央）ら日本人留学生＝同年11月

フェスの最後には、ネイティブ・アメリカンの伝統的なダンスを輪になって踊った。サウスダコタ州はネイティブ・アメリカンと縁が深く、ノーザン州立大では関連の授業もある。彼らの文化は地域住民の日常に根付いており、ダンスをみんなで踊ることは次世代への継承のためにも大きな意味を持つという。私も初挑戦ながら、見よう見まねで参加させてもらった。

数々のイベントを通じ、私たち留学生と地域住民との間にも信頼が生まれた。異文化に対する興味や理解が深い人々との交流は楽しく、学ぶべきところが多い。恵まれた環境に感謝しながら、残り少ない留学生活を大切に過ごしたい。

（3年・越智理恵）

ネイティブ・アメリカンのダンスを踊る地域住民と留学生ら＝同年11月